

『教育力の原点』で言いたかつたこと

谷 昌恒

お前なんか学校にくるなど教師が言つた。いや、そんなことは言つていない。少年が異常なまでの凶悪な非行をおかした時、そんな問答がありました。

中学校の校長が記者団との会見の席にのぞみ、重々しくその事実を否定しました。言つたの、言わないの、何故それがそんな問題になるのかと思いまして。少し問題がずれてしまつていても思いました。

お前なんか学校にくるなど言えば、少年は必ず非行に走るのか、走つて当然なのか、当然だとみなが考えているのか。何やら不思議でした。

少年にはいろいろと問題があつたようです。教師は指導に手を焼いていたようです。あの手、この手、手を尽くしていました。さっぱりでした。少年は少しも言うことをききません。教師も人間です、激しくして、つい、お前なんか学校にくるなと言つた。あ

りうると思うのです。父親でも、お前なんか出でい
けと言うことがあるのです。いや、教師として、そ
んな相手を傷つける、とげのある言葉は一切言わな
い。教師はいつも平静で、寛容で、柔和である。や
さしい、理解のある対応をしている。そんなお体裁
の、もっともらしい説明を聞くだけではことはすむ
まいと思うのです。

教育は教師と子ども、親と子どもの、むんずと組
んだ格闘なのです。教師や親だけの独り相撲ではな
いのです。一対一で切り結んで、一つ一つ、相手の
反応に千差があり、万別があるのです。お前なんか
出ていけと親父が言った。ああ、出ていってやる。
こんな家にいるものかと息子が言う。ありうること
です。しかし、日頃おとなしい父親が怒った。堪忍
袋の緒が切れた。その忍耐が尽きたという事実が子
どもを震撼させた。お父さん、ごめんなさい、ぼく
が間違つていました。そう言って、全くあらたまる

こともありうるのです。一対一に切り結んで、何か
が生まれてくる生命の燃焼が大切なのです。

激して、教師が思わずきつい言葉を投げつけた。

はつとして、すまん、すまん、ついひどいことを
言つて、と教師が詫びる。いや、先生、ぼくが悪い
のです。ぼくこそ、生意気なことを言いましたと子
どもが詫びる。ありうるのです。急に素直になつた
子どもの態度に、教師が思わず胸を熱くする。それ
が教育の現場なのです。

大人はいつもしてやる立場、子どもはされる立場
という固定した観点からだけ教育を論じていては教
育は死ぬのです。理不尽な仕打ちを受ければ、子ど
もは深く傷つきます。しかし、どんな仕打ちにも負
けるな。それは単なる精神主義でしょうか。「おし
ん」というテレビドラマがありました。おしんはあ
らゆる逆境を糧として力強く成長していきました。
幼いおしんにさまざまな忍耐を強いた大人たちは、

きびしく自らを責めながら、その健気さをたたえ続けました。

お前なんか学校にくるなど教師が言い、少年が狂暴化した。それは説明の原理なのです。少年たちに負けるなと励ます。不屈であれ、不撓であれと望む。それが指導の原則なのです。

*

『けつぱり先生』は山口瞳の名作です。けつぱる先生とは頑張る先生ということです。猪股校長は私立の女子高校の校長です。卒業式に「仰げば尊し」を歌わせないので。猪股先生は卒業式が憂鬱なのです。自分は至らない人間だ。駄目教師だ。思うことの万分の一もしてやれない。子どもたちに何もできなかつた。一人一人の生徒の前に土下座をしてあやまりたい。それを、「仰げば尊し」などと歌われたら、それこそ穴があつたら入つてしまいたい心境だ。そう言うのです。

猪股先生は魅力のある先生でした。誠実で、熱心な校長でした。生徒の心をとらえて放さないのであります。学生運動の盛りのころでした。高校生までまきこんで、各所で生徒たちは荒れていました。同系列の隣の男子高校でも盛んでした。ある日、その男子校の生徒が大勢で猪股先生の部屋に押しかけてきました。ヘルメットをかぶつて、みなタオルで固く覆面をしておりました。そんなものは猪股先生には全く無効でした。ゴチャゴチャ言つて、いる生徒たちに、ホラ、そこの右にいるのは木村だろう。こつちは田中だ。何だ、君は吉田君じゃないか。一人一人、ピタリと当てていくのです。名前を言われた生徒は、思わず覆面をとります。下からあどけない高校生の顔がのぞきます。みな、間の悪そうな、照れ臭そうな顔をしています。やがて、ゲラゲラ笑い出してしまいます。猪股先生はそれほど、大勢の生徒の一人一人を知つてゐるのです。

しつかりと把握しているのです。

校長に女がいる。そんな噂が立ったことがあります。たしかに、いかにも親しげな女がいるのです。

二人が抱き合っているのを見たという人もいました。教育者としては致命的な噂と言わなければなりません。

女子高校の卒業生で、バーのマダムをしている女です。弟は男子高校に通っています。両親は早く死

に、姉が弟を一生懸命育てていたのでした。弟に脳腫瘍の疑いがかけられます。スポーツに熱中してい

て、時々、わけもなく昏倒するのです。次第に回数

がふえてきました。姉さんの頼みを受けて、校長が奔走するのです。医大病院を紹介したり、検査にか

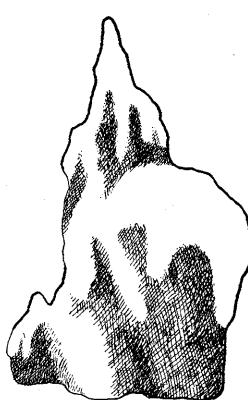
けたり。本人の弟にはその疑いも深く秘めておかねばなりません。余計、校長の気配りも大変です。一

進一退、過度の心労で姉さんが卒倒しかけたことがありました。校長がしつかりと助け起こしたので

す。二人はいかにも訳ありげです。親密にすぎないのです。その事情を説明することはできない。校長は弟が知ることをおそれて、どこまでも伏せています。困難を極めた立場に耐えています。これは尋常

一様の人間にはできないことです。

猪股先生はそういう人でした。暖かく、深く、自省の人でした。一層「仰げば尊し」は歌わせないのです。この魅力ある人物を山口瞳は実にいきいきと描いています。私たちは感動し、引きずり込まれる



ようには読み進みます。教育小説だというのです。しかし、教育小説としてはいかにも不十分です。そこには教師がいるのですが、生徒がいないのです。

生徒はどうしているのですか。ああ、そう、先生は駄目先生ですか。はい、さようなら。そう言って別れていく。先生はいい先生だったよね。先生にはありがとうと言う。先生、先生の授業つまらなかつた。授業は退屈だった。怒ってばかりいた。いきがけの駄賃に、ぶんなくつてやる。そんな生徒たちで困るのです。生徒の主体的なかかわりが知りたいのです。

先生の授業はよく分からなかつた。だけど先生、とても熱心だったね。一生懸命教えてくれた、ありがとうと生徒が言う。どんな先生にも、それぞれに心を捧げてくれる。こうした生徒のありようがほしいのです。

「けつぱり先生」も実はすぐ感動的な話の展開が

用意されていました。猪股先生。「仰げば尊し」も歌わせず、さつさと卒業式をすませ、教師たちを連れて校長住宅に引きあげてきます。酒宴がはじまります。私のような駄目校長を戴いて、みなさん、本当によく勤めてくれました。感謝します。先生は本当に涙をボロボロこぼしながら、酒をついで廻ります。

その時です。遠雷か、地鳴りか。突然、ウオーッと街をふるわす大音響が届きます。いつの間にか、手に手に卒業証書の筒を持って、女生徒たちが路地という路地、道路という道路、一ぱいに溢れ、四方から校長住宅をおしつつんで、一せいに「仰げば尊し」を歌いはじめたのでした。夕闇のせまつた町に、その合唱は美しく、高く、響いていきました。「止めろ、止めてくれ」校長は窓を開けて絶叫します。しかし、女子生徒の見事な歌声はそんな嘆願で消することはできないのです。

校長は歌うなという。その気持ちは深いと思うのです。それでもなお、女子生徒たちは仰げば尊しと歌うのです。教師と生徒、その二つが夫々に活きて、躍動して、教育があるのです。私はそう思うのです。

*

少年の作文があります。題は「おやじさん」。

ぼくの父は小樽の材木屋で木の皮をむく仕事をしています。その会社に入つて二十五年以上になるのに今だに下まく、朝から晩まで汗を流して働いています。学歴のないおやじさんは、ただまじめにコツコツとやるということが一番大事なことだと言つてゐる。おやじさんは僕に学校の勉強、掛け算、割り算は教えてくれなかつたけれど、男の仕事といふのはこんなものだと僕に見せつけてくれた感じ

です。そんなことを考へるようになったのは最近です。前まではそろは考へていませんでした。

毎日毎日汗だらけになり給料も安月給と、おやじさんをバカにしていた時代もありました。その頃のおやじさんは毎日毎日酒を飲んで来て家で大あれば、家中足の踏み場もない程ちらばつて、そんな時泣きながら逃げたこの僕の小さい頃を思い出し、僕はおやじさんに對し中学生の頃、このバカおやじぶち殺してやりたいと思うこともありました。でも酒さえ飲まないととてもまじめなやさしい、いいおやじさん。小さい時いつも僕をおんぶして風呂に行き、からだを洗つてくれたおやじ。僕はおやじさんにおやじさんにとってたつた一つ僕に教えるものなんだなあと。おやじさんは僕に学校の勉強、掛け算、割り算は教えてくれなかつたけれど、男の仕事といふのはこんなものだと僕に見せつけてくれた感じ

さんは仕事だけはどんなに酒を飲んでもよれよれの二日酔いにならうが、大きな弁当箱ぶらさげて朝早く会社に行った。おやじさん。僕は今こう考える。

僕は一度社会に出て仕事に就いた。一度は中三の終わり頃、卒業する前に札幌のある会社に勤め、そこをとび出し、一、二か月小樽で一日一食という生活

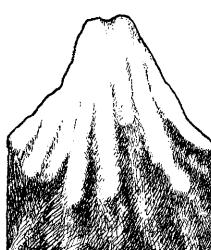
を送り、その時も悪仲間と小樽の盛り場をうろついて、自分の家の部屋でシンナーをやり、遊び放題

遊び、いよいよどうにもならなくなり、ある人の紹介で、また札幌のベンキ屋に勤めましたが、そこも三か月でとび出しました。

そんなことを何度もくり返したのち、いろいろなことが起こり、家庭学校にお世話になることになりました。あの一年前の僕におやじさんみたいな根性、そして意地、一つ所でコツコツ仕事を続ける強さがあれば、僕も失敗しなかったと思います。僕は

「陽一よ、おれももう年だなあ。もうあまり酒も飲めなくなってきた。おれも酒が飲めなくなつたらおしまいだなあ」と静かに笑いながら言つていた。

確かにあの大酒飲んで大あばれしていた時よりは飲まなくなつた。でも僕がおやじさんの会社で一緒に仕事をしていった時は、毎夜焼酎をコップにあけて飲んでいたようだ。そんな時とてもしつこく話して



くる。あの時はいやだつたけれど、今思えば一緒に付き合いたい気持ちがする。焼酎飲んであはれるおやじさん、新聞が読めないのに読めるふりをするおやじさん、掛け算が出来ないのに金の計算がうまいおやじさん、僕の顔を見ると酒飲め飲めというおやじさん。おやじさん。今日も裸電球の下で、一人でコップをかたむけていると思います。

おやじさん。飲みすぎないよう。飲みすぎたら見境がなくなるからと自分に言い聞かせてほどほどにしてほしい。今も思い出している。小さい頃おやじさんにおひさつて道を歩いていることを。僕の手にはチヨコレートが、おやじさんの手には一升瓶があつたことが思い出されてくる。今日も明日もおやじさんは一人部屋で酒を飲んでいる。

少年はすでに四十に近く、家庭を作り、子どももいる。独立して事業を営み、家庭学校の若い卒業生を使つてくれている。文面にあらわれる、少年日の無賴の一面は容易なことではない。しかし、何と心優しい少年であったことか。家庭学校の濃密な人間接触の中で、何と深い思いやりを培つてくれたことだろう、いつまでも心に残る文章を書き残して学校を出ていった。

教育は出来るだけ良い環境を与えて、子どもたちにすくすくと育つてもらいたいと願う人間の嘗みである。その願いに燃えて、国は文教の施策を進め、都道府県、市町村はそれぞれに多額の負担をして教育の施設を作り、親たちは家計の多くを教育に注いでいる。今日、日本の教育諸制度は空前の盛況をしている。

しかし、私たちはもう一つの願いを持つてゐる。どんな悪い環境にも負けない子どもであつてほしいと願つてゐる。環境が悪いのなら、自分でそれを整えていくような創意と勇気を持った子どもであつて

ほしいと願っている。しかし、よく考えてみると、

この二つの願いはそう簡単に両立するものではない。むしろ、深く矛盾しているように思う。

何事も練習なのです。練習に練習を重ねて、人間はものごとに習熟できるのです。悪い環境にも耐える。それも練習なのです。しかし、良い環境に慣れただ子ども、その練習が十分と言えるか。はなはだ疑わしいのです。

教育は本来的に、この矛盾した願いをもつた苦みなのです。二つの中心を持つた橙円というべきでしよう。二つの中心を持つ橙円は極度に緊張した曲線なのです。二つを両立させることは可能なのか。

貝原益軒は「人を育てるには三分の飢と寒を存ずべし」と言いました。益軒が言うのではなく、古人がそう言つていると説くのです。子どもは十分に食わせ、十分に着せる、暖衣飽食させては駄目になるのです。健康には腹八分目と言うのです。二分、三

分、その飢と寒さは必要なようです。

今日の教育制度は空前の盛況だと言いました。そして、今日ほど教育が混迷している時代はないのです。何故か。教育の内蔵する根本的矛盾を知らず、ただ、いい環境、いい環境と一方的に思い込んでしまって、深い落し穴におちたのです。

『教育力の原点』はこのような趣意を、力をこめて書いたものです。それも理屈としてではなく、現場の事実として書きました。賞を頂けたのは、共鳴して下さった方がいる。それも研究者の中にいる。それは私にとって、大へん嬉しいことでした。

(北海道家庭学校理事長)